

僕がデザイナーになったのは事務所を立ち上げてからです。つまり独立後に独学でデザインを勉強したという異色の経歴です。それまでは全くの畑違いである都市計画コンサルタントに勤めていました。幼少時から何故か街づくりに興味があり、生まれ育った岡山の街を東京やニューヨークのように洒落な街にしたい、世界に誇れる街にしたいという想いがありました。今から思えば相当漠然とした夢でしたが、当時はその一心でした。その想いだけで入社できたと言っても過言ではありません。しかし実際現場に立ってみると街づくりというのはそんな漠然とした想いのできるものではありませんでした。日々仕事と言えば数字と文字のらめっこ。つまり街づくりは事業経営と同じで大切なのはお金で、プランを司っているのは法律なのです。(この経験は自身の事務所経営とデザイン提案の中でとても役に立っていますが) しかもその街に住んでいる人々の考えも多様ですし、何より個人の財産に関わる問題も多く含まれます。それを個人の住宅を設計するような感覚でプランナー一人が街全体を設計できる訳がありません。自分自身の無知無能を反省するとともに現実の壁にぶち当たりました。が、一方でお金と法律を重視するこのやり方ではインフラは整備されるけど、本当に良い街、住みよい街ができるのか?という疑問を抱くようになりました。

そんな想いを抱える中、妻からのアドバイスもあり、ポスターや看板などをデザインするグラフィックデザイナーという職業があるということを知りました。一人の力で街全体はデザインできないけれど、ポスターや看板など小さなものなら一人でもデザインできる。街をよく見渡せば至るところに企業ポスターや看板などが溢れています。街は結局そうした小さなものが集まって形成されていて、その一つひとつを良いものにしていけば、きっと街全体も良くなるはず。これは面白そうだということで、先般の無知無能を反省することもなく、いわゆるデザインの経験もないまま一大決心。その後想像通りいや以上の苦労を妻と共に重ね(泣)なんとか今に至るといふ訳です。

昨年秋に岡山県などの主催で後樂園や岡山城を含む岡山カルチャーゾーンを舞台に開催された岡山芸術回廊のデザイン。僕はデザインディレクターを務め、ロゴマークからポスター、チラシ、サインなどビジュアルのほぼ全てをデザインしました。

ロゴマークは回廊の「回」の字をモチーフに、後樂園の芝の緑色と別名烏城と呼ばれている岡山城の黒色を用い、開催会場や作品をクローズアップする様子や驚き・発見の様子、さらに岡山の文化が拡散的に広がる様子をイメージしています。

会期中は岡山駅、岡山のメインストリート(桃太郎大通り)、岡山カルチャーゾーン一帯などにポスターやサイン、懸垂幕など岡山芸術回廊のデザインが溢れていました。またガイドブックやペーパーバッグを持って、その名の通り「回廊」する人たちの光景も多くみられました。

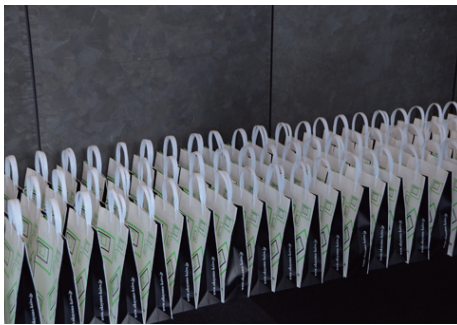
今回のデザインを通して、一時的とはいえ幼少時からの夢だった岡山の街をお洒落にすることが、少しだけ、できたような気がしました。

僕が目指す「お洒落な街」というのはただ「カッコいい」というだけの意味ではなく、景観や街を「きれい」にしたいという意味が強いです。きれいな街には犯罪が少ないと言われる。幼少時から安心して暮らせる街を思い描いていたのかもしれない。

僕にはこうした小さなことしかできませんが、デザインを通して、生まれ育ててくれた街岡山と大好きな日本の「街づくり」に、少しでも貢献できたと思っています。

グラフィックデザイナーが街づくり?

田中雄一郎

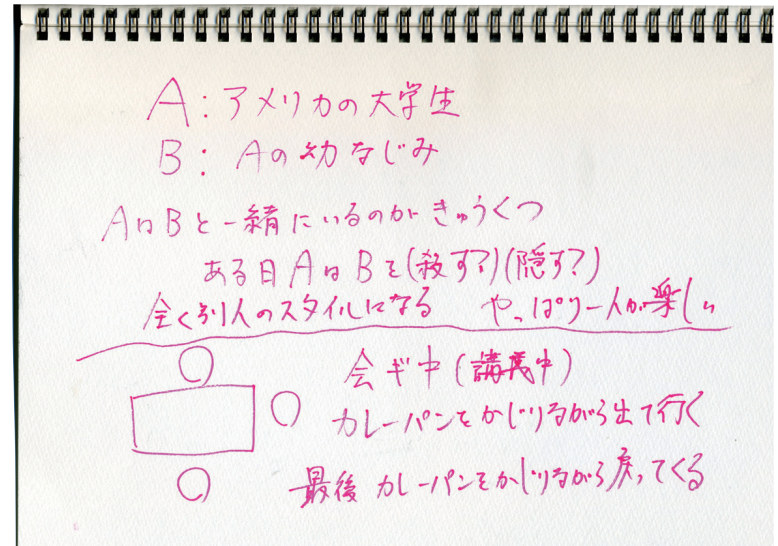


e s s a y

夢 は は か な い
— A と B と カ レ ー パ ン の お 話 —

グラフィックデザイナー

田中雄一郎



夢は夢でも今度は寝ている間に見る夢のお話。夢での物語が自分の想像力と創造力をはるかに超えていて、小説にしたら芥川賞か直木賞、はたまたノーベル文学賞も夢ではないと思ったことはないだろうか?夢の印税生活ができるかと夢みたことは?

僕は夢での物語がまるで映画のように繰り広げられる素敵な展開に、本気で感動して幾度か目覚めたことがある。それまでは何度か起きてしばらくすると忘れてしまった苦い経験があるので、その時は忘れないように記録しておこうと起き抜けにメモしていたらしい。らしいというのは実はメモしたことも忘れていた中、先日片づけをしていたらそのメモがふと出てきた。それで目を通したのだが…。その何とも言えない意味不明な内容に思わず苦笑した。そもそもいったい何の話なのかとも思い出せない。「Aがどんな人物だったのか?ましてやその幼なじみ?のBも。アメリカの話か?ということは英語での会話だったのか?それなら英語がしゃべれない自分にストーリーは理解できないはず???少なくとも殺したいほど、AはBを嫌っていたのか?どんだけ嫌いなんじゃない?ってその後まったく別人のスタイルに

なるって何?やっぱ一人がいいって?」と「?」のオンパレード! さらに「会議中にカレーパンをかじりながら出て行く」とあるが、そんな失礼な!しかもかじりながら戻ってきたとは千万だ。あとどうでもいいけど会議にはもう一人いるな。Cかな?でもメモってない。いったい誰なんだ? 記憶を呼び起こそうと想像力を働かせてみたのだが…。結論、内容がどうであれ、どう分析してもこの物語は面白くなさそう。何が芥川賞だ、ノーベル賞だ。そんな言葉が過ったこと自体恥ずかしい。 やっぱ自分の想像力(能力?)以上のものは夢に出てこない。言われてみれば何も不思議なことではない。夢の中で夢を見てそれがやっぱ夢だったという至極当然な話だ。印税生活は夢のまた夢の夢かな。「夢ははかない」とはほんとよく言ったものだ。常にオーダーメイドのデザイナー生活をこのままたつとつと続けるしかないようだ。しかしあの寝ぼけまなこに感じた感動はなんだったのだろうか?人間の記憶なんていい加減なものだ。そう言えば「記憶にごいません」って答弁を繰り返していた人がいたな。あっそれはまた別の話か?

Yuichiro Tanaka QUADDESIGN style (クオデザインスタイル)代表 www.quadesign-style.com

1975年岡山市生まれ。立命館大学理工学部卒業後、都市計画コンサルタントを経て、2004年妻・園子と共にQUADDESIGN style設立。同時に独学でデザインを学ぶ。現在岡山を拠点に活動し、企業、店舗、医療施設、美術展などのブランディングを中心に手掛けるほか、書籍の装丁や写真集の自費出版なども行う。主な仕事に岡山大学のコミュニケーションシンボルデザイン、福武教育文化振興財団のCI、岡山芸術回廊のトータルデザイン、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館「昭和展」「猪熊弦一郎展」のポスター・チラシ等デザイン、地中美術館のパンフレットデザイン、備前焼作家・役重佳廣作品集「開闢」のアートディレクションなど、JAGDA正会員(岡山地区代表幹事)